コーアズとサービス

高砂　松井　弘行

アメリカにコーアズ（Chores）というしきたりがあります。二十世紀の初頃まで、農村あたりで、子供の多い家庭では子供の年齢に応じた家事を割当て、これらの雑用はすべて子供の家内用務として賄ってゆき、これに対しては何の報酬も当りませぬが、子供等は嬉嬉として、家政に貢献していることを誇としているという、アメリカの美風であります。

これらの雑用はすべて母親が決め、父親は一切これに干渉致しませぬから、子供等に対する母親の統制や権威は、自然に培われて行ったことと考えられます。

一ヵ月経ちますと、子供等の帽子に次の月間の仕事の指図書がつけられます。私の読んだ本の挿絵には、先頭に十四歳位の女の子が手燭を持ち、次に母親が幼児を抱いて進み、その後に二女が幼児のミルクを、三女が薬を持って続き、殿に六歳位の男の子が数枚の毛布を持って行列して行く、和やかな家庭風景を描写していました。

処が機械文明のため、労力が省かれて、子供の用事の範囲も追々減って来ていますが、芝刈や自動車の手入れ等々、その名残りはまだまだ沢山あるようであります。

私はこのコーアズが、ロータリーのサービスに似通っているように考えられますので、先日、お迎えしたスチュワート事務総長に、そのことをお話して見ました処、御帰国早々の総長からお手紙を頂き、「子供のコーアズはロータリアンの奉仕と一致すると思う」という、ご意見を頂きました。

そこで、私は考えるのですが、奉仕と申しますのは、何も改まって考え出す必要は更になく、自然に発露する人間の「まこと」に外ならない、単純なものであるということです。

（兵庫県・弁護士）